

放牧による耕作放棄地対策と畜産振興

- I. わが国の放牧の現状
- II. 耕作放棄地への放牧の凄さ
- III. 土地集積と放牧の理解がキーポイント
- IV. まとめ

(一社) 日本草地畜産種子協会
放牧アドバイザー 梨木 守

I. わが国の放牧の現状

★2018の全国の放牧頭数は、40.5万頭（21%）

★水田/畑/桑園/茶/果樹園跡などに、30年ほど前から
肉用繁殖牛の放牧が開始（10～50頭規模/経営）

耕作放棄地等における放牧の状況（2018）

取組か所数	面積
3,158	10,118ha

資料：飼料課調べ 注1：耕作放棄地放牧・水田放牧等の小規模移動放牧の状況を取りまとめたものである。

公共牧場・放牧をめぐる情勢、2020.4

II. 耕作放棄地への放牧の凄さ

牛が自ら行う

- ✓ 給飼、排泄物処理不要、永年利用＝放牧は容易

社会にとって

- ✓ 耕作放棄地対策（国土資源の有効利用）、景観管理、畜産理解・振興の契機

農家、牛にとって

- ✓ 所得UP（電気牧柵、飲水場の整備して20万円/1ha以下の低コスト（過剰投資抑制）、軽労化、繁殖成績向上、アニマルウェルフェア）

その他の効果

- ✓ 鳥獣害の抑制、動物とのふれあいの場

効果-1

放牧で広い耕作放棄地を管理できる

牛(体重500kg) 1頭180日間で管理可能な面積	
ススキ、クズ、セイタカアワダチソウ、シバ	0.9~1ha
牧草	0.3ha~1ha

草地管理指標、草地の維持管理編および草地の放牧利用編から試算

★放牧は傾斜地や段差地形でも可能



傾斜地もOK
(35度以下)



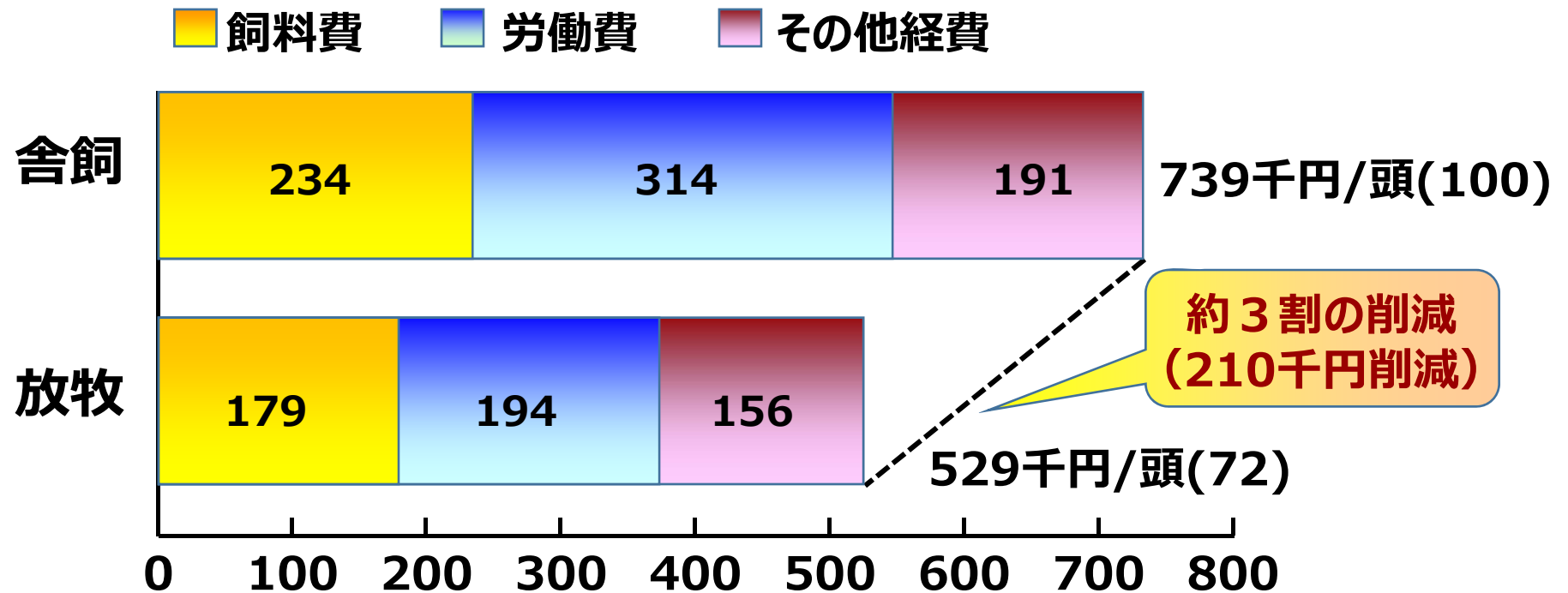
電気牧柵 1本で放牧
コントロール可能



滞水地は明渠で排水化
を図る

効果-2

放牧によるコスト削減効果



注：平成29年度畜産物生産費（子牛生産費2頭～5頭規模 未満）による子牛1頭当たりの生産費を試算

＜前提条件＞ 繁殖雌牛2頭～5頭規模、放牧期間：5月～10月（6か月）

Ⅲ. 土地集積と 放牧の理解がキーポイント

- ◆ 土地集積して広い放牧地を確保
繁殖牛 1 頭の放牧には、0.3ha～1ha必要
- ◆ 周辺住民の放牧に対する同意形成

放牧を推進する制度

- ◆ 放牧の技術指導者および周辺住民の同意を取り付ける
人材の確保・育成の支援
- ◆ 中山間地域直接支払制度のメニューに耕作放棄地放
牧を明記（牛が土地をSDGs的に保全する、畜産的に
地域振興になる）

1) 分散する水田跡地を活用

— 岩手のKさん（102頭、約30ha） —

1. 自己有の休耕水田で放牧を開始



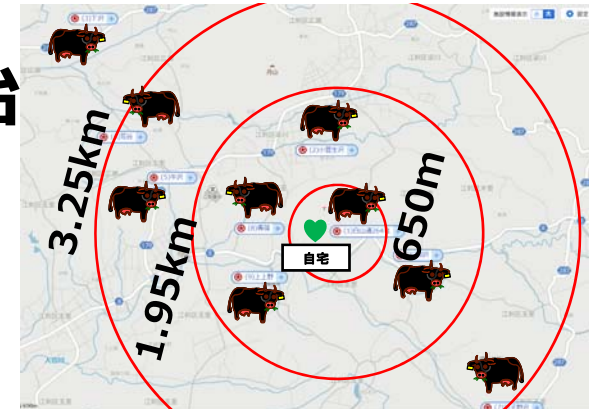
2. 近隣農家から利用依頼が増加



3. まとまった土地が確保できる所を借りる。双方納得した上で借り受け賃貸契約を毎年更新



4. 放牧なしでは繁殖牛経営は考えられない



2) 棚田を一まともに放牧利用



- 宮崎県のIさん（繁殖牛13頭、自己有地、借地合わせて15ha）
- 放牧地内にある水田は夏は牧柵で囲いイネWCS生産、後作のイタリアンライグラスに放牧
- 畑地跡、林地伐採跡にはバヒアグラス

IV. マトメ

(1)技術的に確立しているか	YES	放牧に関する技術は豊富 ✓ 家畜・草地管理技術は開発済み ✓ しかし放牧の指導体制は貧弱
(2)経営としてなりたつか	YES	✓ 活用農家は、放牧なくともはや経営は成り立たないと言う ✓ 一部頭数を放牧するだけでも、ふん尿処理が楽になると言う
(3)農地の管理の実態	容易	✓ 放牧地は永年利用可能、細かな施肥等の管理はそれほど重要ではない ✓ 飲水場など簡易な施設で十分
(4)放牧による効果	高い	✓ 放棄地対策 ✓ 生産費低コスト化 ✓ 牛の健全性向上 ✓ 家畜とのふれあい機能 成果は舎飼以上

IV. マトメ-つづき

(5)放牧の普及方策	緊急	✓ 土地集積が最重要 ✓ 指導技術者、地域リーダーの養成 ✓ 周辺住民の同意：放牧を見せるのが一手
(6)土地貸借、制度面のアシスト	緊急	✓ 農地バンク等が農地斡旋に機動性を持って取り組む（平坦地である必要なし）：土地集積に待ちのマッチングはダメ ✓ 中山間直接支払制度のメニューに放棄地放牧 ✓ 所有者不明地の長期利用可能化 ✓ 遊休農地へ課税（多くの貸し手は土地管理を任せられることだけで十分という）
(7)行政、農業委員会の指導状況	関心高い	✓ 多くの自治体で、既に放牧による耕作放棄地対策に取り組んでいる ★ 1件当たり1ha以上の放牧は少ない
やる気のある人が不可欠		